

「文化と型」再考——芝三光氏講義「はたらく」へのコメント——

藤崎康彦

今年度の公開講座において、芝三光氏には、「はたらく——江戸の職人の世界」としてお話をしていた。それをそのまま再録するには、お話の内容も後程いただいた原稿もいささか量があり過ぎた。また、お話の後での質疑応答を通じて、司会としての私は二、三コメントをつけたかったのだが時間の都合でできなかった。それで私が芝氏のお話や原稿や資料などから要点をまとめ、司会の立場から、気のついたことを述べる形で記録にとどめることとさせていただきます。

芝氏のお話は興味深いエピソードで多彩に構成されているのだが、紙数の制約から講義録や配布資料や講義そのものの中で紹介されたものの多くは割愛し、本誌のためにいただいた原稿及び、私が直接うかがった話を中心にまとめた。

1

芝氏は先ず江戸及び江戸研究について、いくつか注意を述べ、次に江戸の町衆において「はたらく」とはどういう

ことであつたか解き明す。江戸及び江戸研究についての問題は次のようなことである。

(一) 江戸の文化は基本的に、語り、身につけさせることで伝承されて来て、文字には残すものではないとされてきたこと。僅かに文字にされていた記録類も江戸から明治に移る戦乱、激動のさ中にほとんど江戸人自らの手によって焼却されてしまに残っていないこと。

(二) その後新政府のもとで江戸っ子達は自らを語ろうとせず時代の変化の中で、いわば世の中からひきこもってしまったので、江戸から東京に変る過程で、ほとんど復元し難い程の文化の断絶が生じてしまったこと。

(三) 従って、江戸について今知られていることは、ある面、偏った知識なのであり、殊に江戸の庶民の町衆の生活について知りたいたいと思つたら、自ら資料を発掘し文書を解読する努力をしなければならないこと。

(四) 江戸について研究することは、懐古でも反動でもな

いこと。江戸こそは現代の眼からみても、世界的にも稀なる平和的民主的な自治都市であったと考えられ、現代に生かせる知恵がたくさん発見できると期待されること。

以上のような立場からされた探索の成果として、江戸の町衆の世界において、「はたらく」とはどのような概念であるか芝氏の説く所は次の二点にまとめられる。

(一) 「はたらく」と「かせぐ」とは意味が異っていること。「かせぐ」とは労働によって報酬を得ることであるのに対し、「はたらく」とは今でいう「気配り」をすること、いわば「傍^{はた}を「楽^{らく}」にさせてやるために配慮したり行動したりすることを指すこと。

(二) 従って、職人の「はたらき」と言えば、今の我々は具体的な労働の様を先ず思い浮べがちであるが、むしろ先ずもって、職人の心構え、気配り、更にはそれらが行き届いている、仕事をを行う際の態度、振舞い、しぐさ等として理解すべきこと。

このような「はたらき」について、芝氏に従って具体例をいくつかをひいてみよう。例えば大工とか植木職人がある店に出入を許され仕事を任されたとする。その職人は相手の店の名なり屋号なりを入れた羽織を新調する。そのこの仕事をする時には必ずその羽織を着用して出掛け、もちろんそれ以外の時には一切着ない。いわば、その店の仕事にかける覚悟、心意気を示している。こういう心構えは依頼

主であるその店に対してのみ示されれば、依頼者の利益のみを図って他の迷惑をかえりみない態度を形成しがちだが、職人の「はたらき」は、むしろ世間一般への心配りの中にこそ示されていたという。商道徳というべきものが広く社会化されて、地域全般の場面に及ぼされていたことを示すものとして、芝氏は次の魚屋の例を挙げる。魚屋の心得というか営業上の注意として、人に魚の血をみせてはいけなかつた。これは太平洋戦争以前は何とか生きていて、子供が店の前を通る時刻までには、切り身等は全部作って皿に盛り、血は洗い流して店の前を清め、衣服も着がえて、魚の生ぐさい臭いが店先にただよわないようにしていた。店の小僧さんがこういうことを早く飲み込んで手際良く処理すれば、「あの小僧さんは《はたらき》が良い」と人々は言ったものだという。これがどれ程の重みを持つことであつたかを示すエピソードを芝氏は経験している。戦争もたけなわとなり頼みの小僧さんを兵隊にとられてしまつて老夫婦だけで商いをせねばならなくなつた魚屋のおばさんが、店の前を登校する小学生達にわざわざあやまつていたという。「すまないねえ。おじさんも歳をとつてるし、河岸から帰るのもままならないのでねえ。見ないことにしておくんさいよ。お願いだから。」と言つて。老いた夫の足が遅いので荷の届くのが遅れ、子供達の通学時間前に処理できず血を見せてしまふのをわびているのだが、江戸では夫

の足が遅いなどというのは妻の発言としてはあるまじきことであつたという。魚屋の妻はそれを承知した上での気づかい、つまり心の「はたらき」を示したのであるという。

更にまた金魚売り等の物売りの声。のべつにどなったりせず、小さいが良く通る声で、最少限の回数だけかけていたものだという。それも、町内に病人のいることを示す札が角屋敷の軒先に出ているのを見ると物売りはビタリと無言になり、ただ、いたわりのことばは一言かけて通り過ぎたものであつたという。

このように芝氏の語るエピソードを引いていけば限りなく続くことになる。しかしたくさんのエピソードをままとめてみると、(一)江戸の町衆はそれぞれの立場や場面において、振舞いがキチンと決っていて、共通の了解が成立していたこと、(二)それらの振舞いはバラバラではなく一つの理念によつて統合されていたこと、(三)その理念とは世間への配慮であり、それこそが実は「はたらく」ことなのだということ、以上に尽きる。確かに「かせぐ」には自己保存的な、「我」への関心のみに基づく即物的な行動のニュアンスを感じることはできるが、「はたらく」時にはそこから決して対社会的な配慮が脱け落ちることがないということである。

2

以上で、芝氏のお話の趣旨は紹介を切りあげ、話題を拡げて公開講座の共通テーマ「文化と型」につなげるためのコメントをいくつか述べたい。その際芝氏のお話の要点を絞り込んで、(一)行動様式が定まっていたこと、(二)その根底に社会的配慮のあること、の二点に関連して考察を進めた。

先ず(一)について言うと、それが可能であるためには、いくつかの条件が必要であることが、文化研究の立場からは明らかになっている。それはある社会において、(a)社会構造が固定的であること、従つて、(b)人のアイデンティティが自分の眼からみても他人の眼からみても明瞭であること、(c)その人の活動の内容が、あらかじめ明瞭に定義された固定的で有限な範囲を超えることがないこと、(d)それらの知識が関連する人々に共有されていること、(e)その社会は比較的の小規模であること等である。そして実は、これらは、文化人類学が研究対象としている「部族社会」等にもっと明瞭に見られる諸特徴である。比較的狭い地域において、伝統的な生活様式を守つて生活している小規模な社会では、例えばある場面である姿をした人に出会えば、それだけでほとんどのことが分つてしまふ位、行動様式が決つてい

ことがある。服装や髪型等々から、社会的身分、階級、既婚・未婚の別から今のような活動内容に従事しているかまでも分る。従ってあいさつのやり方から、言葉遣い、話題から発想、物の考え方で、ほとんど予想がついてしまう。情報理論の観点からすると、あらかじめ知られている情報が多く、ノイズは少なく、確実だが新しい情報は少ない伝達のあり方である。江戸でなくとも以上のような条件を満す社会ならどこでも振舞いは多少なりとも決っている。例えば江戸からみたら田舎扱ひされていたかも知れない地方都市である水戸の、これは武士を中心とした幕末の頃の日常生活にみられる様式について、山川菊栄が書いているところを見れば良い。『武家の女性』岩波文庫。また同『わが住む村』も岩波文庫にある。また例えば、「江戸っ子」漱石が馬鹿にした松山の道後温泉で、文字通り温泉のつかり方まで教示していただいたことが私にはあるが、温泉という一つの場での振舞はきちんとして土地の人々には共有されているのに感心したことがある。武士や町衆ではない、農民達の行動様式については、日本民俗学の知識に詳しい（坪井洋文他編、現代日本民俗体系8『村と村人』小学館、他参照）。

このように見てくると、思ひは翻つて、現代の日本の状況に向う。現代の東京ではこれらの諸条件はほとんど見出すことが難しいだろう。そして、この、見出すことが

難しいということが、世界的にみて現代化とか都市化とかといわれている現象の特徴の一つをなして、これはほとんど不可避的な傾向であることを我々は知っている。

ここでしばらく(二)について考えてみる。江戸と東京では社会のあり方が違うゆえに、江戸町衆の行動をそのまま真似てみる必要もないことは自明であるけれども、その理念は学ぶべきであろうと言えるかも知れない。しかし社会的配慮とは何か、に大きな問題が潜む。論述の必要上(一)、(二)と分けたが、これは相互に独立したことでない。もし(一)が成り立っていれば必ずそこには(二)も見られるものなのである。本論で考えている行動様式とは、自己にのみ向けられた、個人特異的な行動を指しているのではない。社会生活を行う際の行動様式のことであるが、それゆえにその行為の向けられている究極の目標は社会内の他者である。もしそれが反社会的な性質のものであるとしたら、社会生活自体が成り立たなくなる。どのような意味での配慮かは社会の価値観によって異なるとしても、必ず他を配慮に入れた行動であることは間違いない。そういう配慮にうらうちされていなかっただけならその社会の伝統として残されることはない。社会的配慮があるかないか、つまり「はた」を「らく」にしてやる発想があったかなかったか、が問題となるのではなく、「はた」とは誰のことか、どこまでの広がりとの関係を言うのか、こそが問題なのだ。それによって相手を「ら

く」にしてやる配慮が及ぶかどうかが決るのだから。

例えば、日本の農村において、人々がいかに村の中で他の村人の存在を念頭におきつつ慎重な心配りをして生活していたかについて、日本民俗学は詳しく教えてくれる。しかしその配慮は「村」を超えて及ぼされることは稀であつたらう。江戸ではどうであつたか。それは芝氏の語る所から判断する限り、「町」と言つてさしつかえない。江戸八百八町と言われたあの「町」が、「町衆」の生活の基本であり、彼らが自由に振舞い自治を以て暮らしていたのはその「町内」なのであらう。そして、「我々意識」の及ぶ範囲が具体的な社会の外延とするなら、江戸の人々の社会はまさに、同格同質の町内の集合である「大江戸」を超えることはなかつたと想像できる。

芝氏によれば、江戸の自治組織として「講」があつたという。「講」は町内を基本単位とするものかそれを超えるものかは芝氏の話の範囲でははっきりしないが、いずれにせよその自治組織の担い手の訓練の場として、「寺小屋」があつた。これは田舎における寺小屋とは全く異なるもので、田舎においては「読み書き算盤」のような、実務的な訓練をしたのに対し、江戸では「講」を運営するためのマナー、発言の仕方、物の考え方、忍耐力、洞察眼などを身につけさせることを主眼とした。江戸寺小屋の教育信条は「見る、聞く、話す」であり、考えたり発表したりする力

の養成を目指して、子供同志のディスカッションを行わせるものであるという。しかし田舎寺小屋では頭に立つ人の教育ではなく、江戸の手足になって働く「働き蜂」型の人間教育をしており、そこでの秀才は江戸に連れ出して「御奉公」させた、という。

以上の芝氏の説くところを仮に事実であるとするならば、ここで江戸人の「はた」の本性が明瞭に浮び上つてくるであらう。ここで、(一)において私が途中で話を止めて(二)に移つた理由が分つていただけたと思う。現代の状況を考える時、「村」や「町」の範囲に社会生活の基盤をとどめておくことはもはやできない。「はた」を楽にするという時その「はた」の範囲の知覚を変えざるを得ない。そこから現代の諸問題が生じていると考えるなら、芝氏の説く(一)も(二)も、実は同じ質の困難をはらんでいることが理解されよう。

3

このように、文化の研究者の立場からは、江戸の文化も他と同列の、学ぶべき一つの独自の文化として相対化されてしまう。もちろん芝氏はそのことを十分承知しておられ、もし聞いていただけたら、現在、社会で問題になっていることを解決するヒントも含まれているかも知れないから、という控え目な態度で話しておられる。聞く方としても、

確かに江戸の庶民の生活についてはほとんど知らないので、話を聞くだけで十分に興味深く面白いから、それで結構とも言える。しかし研究者の立場からは相対化されるものであってもそれを生きた立場からは、かけがえのない一つの価値なのである。相対化してしまわず少し話題を転換して、主体の側に視点を移してみたい。芝氏の語るところではなく語る芝氏に注意を向けると文化の問題として重要なことが浮び上がる。

実際のところ私は芝氏についてほとんど何も知らない。しかし芝氏の語りくちを通じて理解し得たことが一つある。それは芝氏にとっては、江戸文化は対象として研究すべきものではなく、自分がそれを生きたものである、と言うことだ。例えば、職人の心意気として、羽織を仕事に際して新調することを述べた。芝氏はそれを知識として語るのではなく、その前にそれを生きてしまっている。つまり跡見の公開講座に招かれたことを記念して、ワイシャツも背広も新調している。それらには記念の意の文字が書かれたり刺繍されたりしている。何回か跡見に足を運んで下さったが跡見に足を踏み入れる時は必ずその背広を着用していた筈である。私共も僅かばかりのお札をさし上げはしたがその数倍の物入りである。その背広をなじみの百貨店に作る時、内金の入れ方に到るまでの細かい心配りがあり、その店は現在でも古い商習慣を知っている人のいる店であ

るらしい。跡見に来る時も、万が一の交通機関の事故に備えて、自宅から跡見までのハイヤー料を確かめ、財布とは別封筒でその額を懐に入れておく。行きと帰りは道を必ず違える……等々これまたたくさんのことを、江戸人なら行うであろう如くに、実行している。にわかには真意が理解しかねるようなこともあった。行きと帰りに必ず道を違えるのは同じ道を通っては待ち伏せされるといけないからだ、という説明はいまだに分らない。江戸にはかなり物騒な面もあったのだろうか。そう言えば芝氏と鍋をかこんで一杯飲んでいた時、私が手洗いに中座して戻って来たら、お立ちになった時のままですよと言われたことがある。相手が座をはずしている時は一切自分は手をつけずそのままの状態におくのが礼儀らしい。というのは、そのままにしておいて、毒など入れてありませんよ、ということを示すためだという。江戸では毒殺が日常化していたのだろうか。これでは親しい奴が一番あぶない、という、未開社会の妖術や呪術の話と余り変らないなと思ったりしてしまふ。きっと私が本当の意味を良く理解できていないのだろう。読者に誤解させてはいけないから生半可な紹介は控えよう。

4

このような生き方をしている芝氏について、私が感想を

述べて、両者で確認し合つたことがある。「人からは變つた人とみられるか知れないが江戸であつたなら極く当り前のことですね」と私がいうと、「その通り全く平凡な百万人の一人に過ぎません」という答えをえた。芝氏がたまたま生れ育つた所が、家庭にしても町内にしても江戸の雰囲氣を色濃く残していたからであらうか、そのように生きざるを得なくなつたということらしい。芝氏はそれを自覚しているがゆゑに、自らを、生きる時と所を間違えた「浦島太郎」とか「生きた化石」とかと称しているのである。そういうえば跡見のため新調した背広のネームも浦島太郎だつた。このようにその人が幼い頃身につけたある文化が、かけがえのないものだ、と本人に思わせる力があることが、「文化」というものの一般的性質の一つであることを承知しておけば、芝氏の話は、芝氏がそれを芝氏なりに生きざるを得ないところの江戸の話なのであると納得できるのであるまいか。そうすれば、彼の語るエピソードの受け取め方も異つてくると思う。

関連してもう一つ述べたい。子供の頃にいわば「刷り込まれた」行動様式が、主体の側からは価値を持ち、身心ともにその様式を文化に組み込まれてしまふメカニズムについては、同じ公開講座の日高氏の「動詞の生物学的基礎」で説かれておられるので詳しくはここでは触れない。しかし、互に異質な文化に生れ育ち、異質な価値と行動様式

を身につけた人々が多数出会うことになつてしまつた状況——これが前に述べた如く、現代の大都會の状況であるが——に身を置く時、果して我々はどのような態度をとっているものであらうか。少くとも二つの態度を、想定できる。状況を否定的に捉えることと、肯定的に捉えることである。

芝氏の行動様式を知つたとき、それだけの配慮を払いつつ生きることは、現代では苦痛なことでしょうとときくと、嫌な世の中になつたもんだと思つていますという答が返つて来た。とするなら必然的に自分の表現がそのまま違和感なく受け入れられる世界を希求することになるだろう。

「江戸の良さを見なおす会」を主宰する彼の自己紹介文が公開講座の講義要項にのつているが、そこには、「夢は、環境の良い所に『プチ江戸の町』を作り、コインロッカー・ベビーを集めて、立派な『江戸っ子』に育てることです」とある。余りにも良くできた文であるが、解説を蛇足ながら加えたい。芝氏が理想とするような、キチンとした行動様式を人が身につけるための条件は前に述べた。その観点からすると、先ず生活の場として明瞭な境界をもつ空間が必要だ。「環境の良い所に」とあるように、現在の東京とは異なる所に領域を囲い込まねばならぬ。そしてそれは広すぎては困る。「プチ江戸の町」とあることから、肉体の尺度に合つた広さと、行動様式に見合つた構造が示されて

いる。更に、人が文化を「刷り込まれる」ためにはそれなりの条件が必要だ。特に、普通「第一次社会化」といわれているが、家庭や親族関係の中での経験が決定的であるわけだが、現在の状況で家庭に子供をおいたままでは江戸の文化は身につかない。さりとて親から取り上げるわけにもいかない。とするなら、親から遺棄されかつ十分に幼くて「刷り込み」が完了していない存在として、まさに「コインロッカー・ベビー」でなければならぬのだ——しかし、これは余りにシニカルな見方かも知れない。ではあるが、再三繰り返している如く、この芝氏の夢は、現在の状況に否定的な見方をする人が必然的に抱く、反現実のユートピアなのであることは了解されるであろう。

では肯定的にあるいは積極的にみるとはどのようなことであろうか。私には一人の人が思い浮かぶ。以前跡見でも講義を担当していただいたことのある西江雅之氏である。芝氏が同質的な文化が維持されきちんとした行動様式が存在している所（江戸）にひかれるのと対照的に、西江氏は異質な文化背景の人間が出会い様々な予期せぬ現象が生ずる所を好む。一時期のペリヤ、ロサンゼルスや、ナイロビ等である。同じアフリカでも部族社会そのものよりも、多くの異なる部族出身者や外国人の集っているナイロビや、同じ東京でも新宿にひかれるのであるらしい。この辺は西江氏の旅の記録（手頃なものに『花のある遠景』旺文社文

庫がある。）を読んでもらえば、分かると思う。

西江氏のテーマの一つは、人と人が出会う時、どんなことが生じているのだろうか、どのような伝え合い、人々はそののだろうかということである。西江氏の考え方は文化とはコミュニケーションのコードに相当するといえる。人々が相手から意味を読みとる時、文化的約束事に基づいて色々推論している。芝氏の話から例をとるなら、江戸で、人が活動し始める時刻までに魚屋の店先が片付いていなければ、人はおやと思うだろう。何か障害が生じたかと案ずるかも知れない。しかしそれが度重なれば、あそこの店は「はたらき」が悪いだけだ、と思うであろう。このように、行動のきまりとして了解されている事柄は、それによって個々の状況を判断するの意味を解読するためのコードⅡ暗号解読表となる。もしそれが、社会の中で余りに均質かつ詳細明確に定まっていたら、先程述べた如く、人の表現は総て定型的な行動で埋めつくされ、コードが人の肉体に実現しているだけになる可能性もある。そうではなく、互に異質なコードを持っている人同志が出会い、伝え合いをする状況ならどうであろうか。互の読み取りは複雑になるかも知れないが、豊かさや面白さは増大すると考えることもできる。西江氏はそのに積極的な興味を感じている。我々が芝氏に江戸で出合っても平凡な人に過ぎないが、現代において出会うからこそ興味深い人なのである。

以上で私のコメントは終えたい。芝氏の訴えたいことは正当に受けとめ、多彩なエピソードを基本的な原理でまとめて、講座の趣旨との関連で生じてくるいくつかの問題について私なりに解き明かす作業を行ったつもりである。芝氏の話素材にして、文化について理解を深めてもらえば、読者ご自身の周辺に生じた問題についても自分なりの見方をとることができるようではないかと思う。例えば、以前、横浜で少年達が公園の浮浪者を襲って殺した事件があり、社会に衝撃を与えた。芝氏は、江戸では、人と争ったりしても決して腕を肩より上げてはいけないというようなしつけをきちんとしていたが、このような江戸の知恵を現代に生かすことができたなら、何か役に立つのではないかと、言っておられたことがある。読者ならどう考えるであろうか。公開講座ではこのような所まで掘りさげて議論することは難しいと思うが、できたら展開したかった。遺憾ながら事前の打ち合わせが不十分で、芝氏にも思うように話してもらえず、申し分けなかったし、媒介の任にあたる司会者としても心残りであった。我々の意を汲んで、江戸の文化にも文化の理論にも理解を深める努力を受講生ならびに会員各自にしていただけなら幸いである。

注

(1) 人間については「刷り込み」とは言わず、刷り込みがあると

言えるかどうか議論があるが、文化を身につける過程「文化化 (enculturation)」について、比喩的に強調して言うこともある。なお本稿では、具体的な行動様式としての文化に議論が限られてしまったが、型が認められるのはそのレベルのみではない。文化の深層においてこそ「型」の概念が問題とされる。そのようなものとして、加藤周一他、「日本文化のかくれた形」岩波書店がある。この「かくれた形(かたと読む)」とはユングのアーキタイプの概念に基づいた概念である。ユング心理学におけるアーキタイプ(普通、元型と訳されている。)については、ユングの原典が『元型論』、『続・元型論』(林道義訳)紀伊國屋書店としてまとめられているが、易しくはないので、初めての人は河合隼雄『ユング心理学入門』培風館で理解されるのがいい。この、ベネディクトの「文化のパタン」の考え方も通ずる面については、本誌の文献案内に基づいて理解を広げて欲しい。

(2) 規則がはつきりしていると不自由になるということではない。規則に従いつつ最大限の創造性が発揮できることは、ある言語の語彙や文法の有限性の制約の中で、豊かな作品が書かれていることからすぐに理解されよう。ここで触れた西江雅之氏のコミュニケーション研究の内容については、月刊「言語」(大修館書店)第5巻の1と4号、6と11号に連載された「伝え合いの人類学」に詳しいが、むしろ同誌の第2巻3号の「アフリカの社会人の会話——多言語使用」が面白い。

(ふじさき やすひこ・専任・文化人類学)